

こんな時代だから音楽を — 坂本龍一 戦うに非ず —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

世界貿易センタービルが崩壊し、多くの人々の命が失われた。2001年9月11日、アメリカ同時多発テロが勃発する。議会でブッシュ政権の報復攻撃を承認する決議が採択された。

音楽活動の拠点をニューヨークに移していた坂本龍一（1952—2023）はテロ現場から2kmほど離れた自宅で事件を知る。イエロー・マジック・オーケストラ＝YMOで国際的に成功し、映画音楽の分野で日本初のアカデミー賞作曲賞を受賞するなど世界のサカモトと呼ばれていた。

異常な事態に坂本は大手メディアの流す報道ではテロと戦争の真実が見えてこないと痛感する。自分に何ができるのか。友人たちに重要と思われる論考や記事を発見してメールで送りあうことを提案した。「知るということは生死に関係する」と。

クラシックからテクノポップへ

坂本は東京都中野区で生まれた。父は河出書房の編集者で三島由紀夫、中上健次、高橋和巳などを担当、母は帽子デザイナーをしていた。

3歳からピアノを習い、10歳で作曲を学び始める。特にドビュッシーとバッハに魅せられた。

世田谷区に引っ越し、祖師谷小学校、千歳中学校を経て都立新宿高校に入学する。高校時代には新宿のジャズ喫茶や映画館に入り浸った。読書も好きで学校図書館に頻繁に通う。ベトナム戦争に反対する学生運動が世界中で高揚するなかで坂本も友人たちと抗議のバリケード封鎖を決行した。

東京芸術大学に進学し、民族音楽の研究で著名な小泉文夫の講義を受け、クラシック中心の西洋的音楽観を根底から揺さぶられる。音楽学部作曲科を卒業後、大学院音楽研究科修士課程に進む。

大学院在学中、スタジオ・ミュージシャンとして活動を開始する。友部正人、りりィ、大瀧詠一、山下達郎、大貫妙子らのキーボード、アレンジャー、プロデューサーなどを務めた。

新たに細野晴臣、高橋幸宏と共に1978年、YMOを結成。シンセサイザーを駆使した楽曲「テクノポリス」など独自のテクノポップで世界的反響を巻き起こす。坂本初のソロアルバム『千のナイフ』もリリースし、現代音楽の旗手・高橋悠治と連弾を行った。翌年からYMOはワールド・ツアーを展開。矢野顕子、渡辺香津美、村上秀一などとのセッションユニットKYLYNでも活躍した。のちに矢野と結婚し、シンガーの坂本美雨が生まれる。RCサクセションの忌野清志郎とコラボした楽曲『い・け・な・いルージューマジック』がヒットし、テレビでも過激なパフォーマンスで評判を呼ぶ。

兵士たちの葛藤と愛憎を描いた大島渚監督の



坂本龍一

映画『戦場のメリークリスマス』ではヨノイ大尉役で出演し、デヴィッド・ボウイ、ビートたけしと共演した。1983年に公開され、同名のテーマ曲は坂本の代表作となる。次作の『ラストエンペラー』ではアカデミー賞作曲賞を受賞し、映画音楽家としても不動の地位を確立した。

誰もが声を出せるのが民主主義

世界を舞台にするようになった坂本は1990年からニューヨークに移り住む。1990年代中盤にはライブや作品のインターネット配信を日本で初めて行った。後半はアコースティック作品を中心に制作し、CM曲「エナジー・フロー」を収録した『ウラBTTB』がミリオンセラーを達成した。

その一方で社会問題に積極的に関与していく。地雷除去活動を支援するチャリティソングとして『ZERO LANDMINE』をリリースする。

アメリカ同時多発テロの発生に際しては大手メディアが扱わないネット上の情報を中心に監修した論考集『非戦』を2001年12月に刊行した。報復の武力行使を認める決議にただひとり反対したバーバラ・リー下院議員の演説などを掲載した坂本は「こうした声を少しでもたくさんの人に読んでもらいたい」「戦うに非ずですから、とにかく僕は人が人を殺すのは良くない、殺さないでくれと思っているわけです」と語っている。

同時に「音楽は平和じゃないと楽しめない」「人々に、あるいは兵士に、あるいは戦争を遂行する当事者に、もう一度、ここに音楽という人類にとって宝のようなものがあることを思い出させるような音楽が必要だ」と想いを新たにした。

日本では青森県六ヶ所村の核燃料再処理施設問題や新潟県中越沖地震で柏崎刈羽原子力発電所に被害が生じたことをきっかけに脱原発を唱え、数多くのチャリティ・コンサートを開く。東日本大震災では損壊した楽器を復興する「こどもの音楽再生基金」を設け、kizunaworld.orgやLIFE311などの被災地支援プロジェクトを立ち上げた。

福島第一原発事故を受けて開かれた脱原発集会では「たかが電気のために命を危険に晒してはいけない」と発言して物議を醸す。音楽家は音楽だけやっているという批判に対して「発言するか

ら偉いとも思っていません。でも音楽だけやればいいとも思わない。普通の人が口を出すのが民主主義でしょう。職業に関係なく誰もが声を出せる社会じゃないとダメだと思うんです」と反論した。

右手がピアノを弾くように

所属事務所は2014年、坂本が癌を患い、当面治療に専念すると発表した。翌年、山田洋次監督・吉永小百合主演の映画『母と暮せば』の音楽を手がけて仕事に復帰したものの、癌が転移して何度も手術を繰り返す。東日本大震災を体験した若者による『東北ユースオーケストラ演奏会2022』に登場したのが公の場での最後の生演奏となった。坂本のピアノ伴奏で吉永小百合が詩を朗読する。『新潮』の2022年7月号から「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」の連載を開始した。

同年9月中旬、NHK放送センターでピアノソロ演奏の撮影が行われ、世界に配信された。翌年の3月28日、71歳で逝去する。坂本の訃報は速報で全世界に伝えられた。共演した歌手の加藤登紀子は「素晴らしい音楽家であり、思想家であり、行動者だった」と永遠の別れを惜しむ。

生前の吉永小百合との対談では「自国第一を主張する大統領や指導者が世界中に何人も出てきています。こうした流れのなかで私たち一般市民がどうすれば核のない、戦争のない世界に向かっていけるのか」と問いかける吉永に坂本は「緊張が高まっている今だからこそ小説や物語、映画や音楽やアートに力があるような気がします。忘れていたことを思い出させるのは音楽やアート、映画や小説の役割ではないでしょうか。こんな時代だから今までになく音楽やアートが必要だと僕は強く思っています」と答えている。

亡くなる直前には明治神宮外苑地区の再開発の再考を促す書簡を小池百合子東京都知事などに送っている。「100年かけて守り育ててきた樹々を犠牲にすべきではない」と訴えた。

死去から約1年後「Last Days 坂本龍一 最期の日々」がNHKで放送された。遺族の撮影・取材協力で死に至るまでの克明な状況が公開される。臨終の1時間ほどまえに意識がない状態で坂本の右手はピアノを弾くように動いていた。